

# 博士学位論文審査要旨

2020年6月13日

論文題目： 北海道続縄文文化の研究

学位申請者： 鈴木 信

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 水ノ江 和 同

副査： 文化情報学研究科 教授 鋤柄 俊 夫

副査： 北海道教育庁 生涯学習推進局 文化財・博物館課  
課長補佐（文化財調査係担当） 西 脇 対名夫

要 旨：

本論文は、北海道の続縄文文化の実体について、おもに考古学的手法によりそれを解明しようとするものである。

続縄文文化とは、本州・四国・九州のおよそ弥生・古墳・飛鳥時代に併行する北海道を中心に存在した文化であり（紀元前5世紀前葉頃～紀元後7世紀後葉）、縄文時代以降も稲作農耕文化が到来せず縄文文化がそのまま一定期間存続した文化として、1936年に山内清男が提唱した。

本論文の問題意識は、合成語である「続縄文文化」がはたして縄文文化の後継であるのか、それとも後継ではなく別の用語を設定して新たな位置づけを行うべきか、にある。このことを起点にして本論文ではまず、続縄文文化を生みだした当該期の自然環境（気候変動）を確認することからはじめる。同時に、用いる考古学的手法について説明するが、これについてはイギリスのDavid L. Clarke や Colin Renfrew が提唱したプロセス考古学的手法（動植物考古学による遺跡情報の多様化、考古資料の数量化、空間情報の重視など）に基づく。そして、考古学においてもっとも基本となる時間軸と空間軸を設定すべく土器の編年研究を徹底的に行い、当該期の北海道を13期・4地域に分けて、各種遺物・遺構・遺跡の変遷と系統関係を追究して議論の下地を作る。

そしてまず、生活基盤となる生業についてサケ・マス漁などに注目し、その行動範囲から続縄文文化の領域を規定した。次に、道具が石器から鉄器に変容していく過程を通じて、北海道の周辺地域との交易の実体及びその具体的な手法を明らかにした。また、墓制では葬法と副葬品から階層性について検討を加え、続縄文社会の復元を行った。さらに、この続縄文文化が次の擦文文化にどのように展開していくか、すなわち擦文文化の系統についても予察した。

本論文は、これまで個別の時期や地域、あるいは個別の遺物や遺構について検討されてきた北海道の続縄文文化について、自然環境を踏まえながら独自の手法を考案・提示し、その上で精密な土器編年に基づき各種遺物・遺構・遺跡を網羅的に検討した、新たな観点による総括的な研究であり、北海道続縄文文化研究の新展開が期待されるものとして位置づけることができる。

よって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 学力確認結果の要旨

2020年6月13日

論文題目： 北海道続縄文文化の研究

学位申請者： 鈴木 信

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 水ノ江 和 同

副査： 文化情報学研究科 教授 鋤柄 俊 夫

副査： 北海道教育庁 生涯学習推進局 文化財・博物館課  
課長補佐（文化財調査係担当） 西 脇 対名夫

要 旨：

上記の審査委員3名は、2020年6月13日13時30分から16時30分まで3時間にわたり、学位申請者の専門分野の学力確認を行った。

まず、口頭試問では、提出論文に関する詳細かつ多岐にわたる質問が行われたが、いずれに対しても的確かつ明快な応答が得られ、さらに、申請者が考古学に留まらず文献史学や民俗学についても幅広い学識を有していることが立証された。また、引き続き行われた語学試験（英語）においても、十分な語学力を備えていることを確認した。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目：北海道縄文文化の研究

氏名：鈴木 信

要旨：

縄文文化は、北海道を中心に紀元前5世紀前葉頃から紀元後7世紀後葉（弥生時代～飛鳥時代）にかけて、約1,100年間続いた文化である。「縄文」という言葉は、前代の縄文文化から引き続くものとして1939年に山内清男やまのうちの すけおにより命名されたものであり、Jomonにepi-を接頭した合成語である。epi-は接続を含意するので、北海道から東北地方北部における縄文文化の後継と考えられていた。

具体的には、縄文文化期の前葉（紀元前5世紀前葉～紀元前2世紀前葉、弥生中期前半まで）には北海道の南部・中央部・東部に地域色のある縄文文化以来の文化が継続した。しかし、中葉（紀元前2世紀中葉～紀元後2世紀後葉、弥生中期後半～後期）に南部では東北地方北部の影響を受けた恵山文化えざん、中央部では南部と東部の影響を受けた後北文化こうほく、東部では在来の宇津内文化うつないに三分した。そして、後葉（紀元後3世紀前葉～紀元後7世紀後葉、弥生後期末～飛鳥時代）になると後北文化が南部・東部にひろがり、東北地方北部にもその土器・石器製作技術・墓制が南下する。

本論文の目的は、多面的視点に基づく北海道における縄文文化の総合的研究を確立することにある。対象とする資料は2019年までに発刊・発表された発掘調査報告書と研究論文とし、新来の方法論を提案して分析を試みた。以下にその概要と結果を述べる。

第I章では、問題提起の序として北海道の縄文文化と縄文文化の定義を以下のように再検討した。すなわち、従来の研究では、縄文文化とは「単に縄文から引き続くもの」との定義であった。しかし本論の結果では、語根である北海道の縄文文化は、本州のそれとは異なって要素の欠落があり、本州の縄文要素を受容した場合には遅滞があり、要素を減じていた。

第II章では、研究史を検討し問題点を析出した。従来研究では軽視されていた「縄文文化の文化区分上の位置付けが縄文・弥生文化と同位か」「縄文文化の要素に新規性はあるのか否か」「気候変動と文化変容に相関的関係があるのか」「文化変容は属性分析を通じて検討すべきである」が課題としてあげられた。

第III章では、「気候変動と文化変容に相関的関係があるのか」を検討した。文化は自然環境のなかにあり、そのうち動植物相は人間活動⇌生業と密接にかかわり「文化」変容の背景を構成するからである。ただし、従来の研究では陸域・海域における動植物相の総合的評価はなかった。

気候変動と生態系変動の関係に以下の結果を得た。動植物相は大局では気候変動に相応しながら、動物相・植物相、陸域・海域は連動しつつも個々に差異がみられ、生態系が複相性を帯びた状況であったことが確認できた。

第IV章では、「文化変容は属性分析を通じて検討すべきである」について属性分析の定義・方法を検討した。従来の研究ではややもすれば定義や分析に用いる属性の選択が恣意的であり、属

性の操作性についての議論が意識的ではなかった。そこで、考古学的現象を記述・分析する基礎的作業の基底にある考古学的実体について客観的説明を試行した David L. Clarke<sup>1)</sup>に基づいて、属性を分解不可能な独立した最少単位として設定し直した。くわえて、属性には情報再生の場における情報の共有関係の濃淡を表す「内在的属性」「表出的属性」「中間的属性」があることを明らかにした。内在的属性：完成事象からは窺い知れず、属性転移には時間・場面の共有が必要。表出的属性：部分的完成事象からでも理解でき、属性転移には時間・場面の共有を必要としない。中間的属性：場面によって、内在的または表出的に移行する。

第V章では、縄文時代晩期後葉～続縄文時代後葉（紀元前7世紀中葉～紀元後7世紀後葉）の北海道中央部における深鉢の型式編年による考古学的時間軸の設定を行った。北海道中央部の編年を南部・東部と比較することにより、3地域の編年網が連携可能となった。

第VI章では、設定された時間軸に従い、基本的実体の変質・変形・交換という3属性を視点として記述した。考古学的実体の基底にある諸属性の変容についての分析は、その連続体でかつ上部に位置する「文化」変容の解明につながる。このように3属性を視点とした従来研究はない。

その結果、北海道内における属性交換は隣接する地域へ・隣り合わない隔離地域へ、があり、隔離地域への転移は必ず隣接地を経ていた。そして、表出的属性は、中間・内在的属性に比べて転移が頻繁に起こることが明らかになった。

第VII章では、「続縄文の文化区分上の位置付けが縄文文化・弥生文化と同位か」「続縄文文化の要素に新規性はあるのか否か」について生業から言及した。従来研究では文化区分上の位置付けは固まっておらず、従って要素の新規性についても定まっていなかった。

以下の結論を得た。縄文文化から続縄文文化への移行はこの状況を反映して地域ごとに異なり、弥生文化の影響ののちに後戻りする南部・中央部の「変則回帰型」、弥生文化の影響がみられない東部の「逸脱継続型」、がある。縄文文化・弥生文化と同位ではあるが、枝わかれした別系統である文化区分としてよい。「逸脱継続型」「変則回帰型」の生業は、自然環境が極性を帯びる時期であっても多様性を維持する。続縄文時代において生じた「生業の特化：縄文時代以来の生業において、威信の狩猟漁労や換財取得のための狩猟漁労を生業の中心に据える」はその多様性に裏打ちされていた。

第VIII章では、交換という視点から以下を検討した。交換が文化維持・文化変容に重要な役目をする生業の一部であるという視点はなかった。また、行動様式と行動領域という新しい視点を導入して文化の時間的・空間的広がりについて言及した。

以下の結論を得た。交換は生業成果の配分を調整する「域内交易」、自製・獲得不可能な非現地性物資を求める「渡海交易」がある。「渡海交易」はI～VII段階に変遷し、I～IV段階が続縄文文化にあたる。IIb段階（紀元後3世紀前葉～紀元後4世紀中葉、弥生時代後期末～古墳時代前期中葉）では、南部・中央部・東部という伝統的領域が解消され、東北北部においては北海道続縄文人の定住が起こった。IIIb段階（紀元後6世紀前葉～紀元後6世紀後葉、古墳時代後期）には、利器の鉄器化の進行と準構造船の大型化により「渡海交易」が盛んになり、それが原因で各地に文化変容が起きる。

「季節的狭域移動」の領域規模は河川に沿った長軸約35km×短軸10km、「季節的広域移動」の領域は半径約45～93km、「季節的超広域移動」の領域は海岸に沿って最長約700kmが策定された。そして、生業の特化は、David L. Clarkeの提唱した文化（一定の地理的範囲内において、恒常的

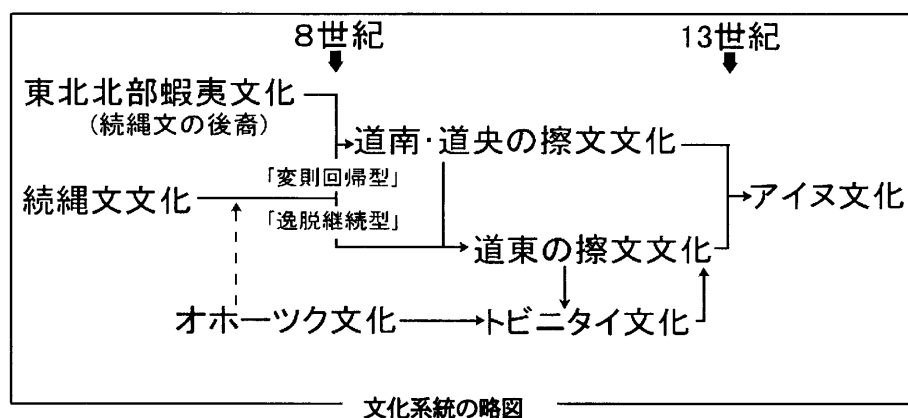
に反復される特定の・包括的な人工物型式の複相的な組み合わせ。その範囲は推定半径 32～322 km) の大規模で起こる現象といえる。「季節的超広域移動」の領域の範囲は David L. Clarke の「文化群」の最大値にあたり、「季節的超広域移動」=渡海交易の領域は「逸脱継続型」「変則回帰型」の範囲を越えて本州に及ぶ。

第Ⅸ章では、続縄文墓制についてその構造・副葬品を通じて階層差に言及した。階層から階級への変化は経済的側面（分業・貯蔵・分配という仕組み）が威信の側面を侵蝕する過程であるから、階層差の発生は経済的側面の評価による。よって墓制を分析する際には交易・生業からの視点が必要であると考えた。

以下の結論に至った。墓制のうち、墓の構造・副葬品からみた続縄文の階層差は一部地域・遺跡ごとに異なり、血統で維持された場合は2世代、別の仕組みによって維持された場合は、それを墓制に関わる“文化”変容とみなすと4～5世代と想定できる。

Ⅹ章では、後継研究における続縄文文化の意義について示した。続縄文文化は次期の擦文文化～アイヌ文化（紀元後8世紀前葉～紀元後19世紀中葉）にも大きな影響を及ぼすもので、主なひとつは擦文文化の系統、もう一つはアイヌ文化の系統、である。

端的に言えば前者は続縄文文化とオホーツク文化との融合、後者は擦文文化とオホーツク文化の後継であるトビニタイ文化との融合によって生じたといえる。



結語 この続縄文文化論に関する研究の新規性は、情報再生の場における情報の共有関係を示す「内在的属性」「表出的属性」「中間的属性」を用いて分析を行い、その流動性・転移の方向を明らかにしたうえで以下の結論を導いたことにある。続縄文文化は縄文・弥生文化と同位かつ別系統の文化区分である。本州以南と異なる複相性を帯びた生態系に対して地域ごとに異なる「生業の特化」をおこなうため「変則回帰型」・「逸脱継続型」があり、「渡海交易」が各地に文化変容を起こし、伝統的地域が統合された。墓制からみるとその階層・系統は固定的ではなかった。

1) 英国人 David L. Clarke の考古学の特徴は、いろいろなプロセスが「なぜ」生じたのかを客観的・科学的に説明することを重視し、そのため考古学資料の数量化、空間情報を分析の基礎とした。彼は数量化に関して生物学における数量分類学の影響をうける。代表的著作『Analytical Archaeology』(1968)にその内容が語られている。